

宇 治 紬 物 語 ニ ュ ー ス



「琉球かすりの^{いま}・^{むかし}昔展」が琉球かすりの里「南風原」で開かれました

沖縄の戦火を逃れた琉球かすりを集めて・・・。

平成 26 年 3 月 7 日～10 日、改装された「琉球かすかり会館」で、明治・大正・昭和に沖縄の一般の人々が実際に着ていた琉装※1 を中心に展示されました。沖縄の古い衣装は、先の大戦で戦火を逃れたものは少なく、殆ど残っていないと普段見ることが無く貴重な展覧会となりました。

(主催:琉球かすりの今・昔展実行委員会/共済:琉球絣事業協同組合/協賛:(有)しるべ/後援:沖縄タイムス 琉球新報)

この企画展では、戦火を逃れ今に残る貴重な琉球絣などの貴重な染織資料と今日、南風原で織られている絣織物を同時に展示し、時代の変遷を認識する上でも大変有意義な展覧会でした

南風原は、戦争により壊滅的な打撃を受けたにもかかわらず戦後まもない昭和 24 年 (1949) ごろには、織物産地として再びその息吹を取り戻し始めました。高機(たかはた)や織物道具を復元するなど、織物生産の基盤づくりに努めました。そして、1972 年の本土復帰を境に、沖縄の手仕事による伝統技術への理解や評価が高まり、南風原の絣織物もそのひとつでした。

1978 年に大城カメさん、1989 年には大城廣四郎さんが、現代の名工にも選ばれました。



NHK 沖縄放送局や後援の沖縄新報などの取材もあり、多くの方に来場頂きました。

ものづくりの向上に



かすりの里、南風原町でこの晴らしい展示会を開く事ははじめてで、大変うれしく思います。昔の人が織ったものを参考にして、ぜひ、自分のモノづくりの向上に役立てて欲しい・・・。

(野原八重子琉球絣事業協同組合理事長)

今以上に頑張ってください

城間俊安南風原町長

今以上に皆様が頑張れば頑張るほど、町としてもそれに応え、織物事業の発展のために尽力を尽くしたい。

(※1.)琉装とは・・・日本に和装があるように、沖縄には琉装があります。琉球の、高い気温の中で、日常の生活にあう伝統的な着方。和装のように帯を使わず、ウシンチーと呼ばれる腰あたりに細帯を締め、その上から着物を着て合わせたところをつまみ、腰帯に挟んで着る。

「はえばる」南風原。

展覧会がおこなわれたのは、「南風原」。

「はえばる」と読みます！

かすりとかぼちゃで知られる町です。かすりの拠点となる琉球絣事業協同組合があるのが、今回の展覧会場「琉球かすり会館」です。

かすり会館は昭和54年に琉球絣を全国に広めるために建てられました。しかし、長年の歳月が過ぎ、老朽化が進んだため、今年、その機能を高め、琉球かすりを今まで以上に身近感じてもらうため、改装、今年の2月に新しく生まれ変わりました。

琉球かすり会館

その記念として展覧会を開きました。

開催に先立ち、南風原町の城間俊安町長はじめ、野原八重子琉球絣事業協同組合理事長、山田標件織の財団理事長(有限会社しるべ会長)など来賓によるテープカットがおこなわれました。

その様子は、NHK 沖縄放送局、OCN、琉球新報、沖縄タイムスなどの取材があり、多くの方々にお越し頂きました。



沖縄の染織品の種類が多いのに驚く



先人達の努力で沖縄の染と織は支えられる

会場は、絣織物に携わる方をはじめ、那覇近郊の方や、ニュースで見たといい、沖縄を旅行中の札幌や東京からみえた方もおられました。



日本のかすりは沖縄から伝わった

琉球絣事業協同組合で伺いました。

琉球絣事業協同組合は昭和50年2月13日に設立されました。

昭和52年、南風原町が「かすりの里」宣言をしました。

琉球絣の特徴は、およそ600種という多彩な図柄にあります。この図柄は琉球王府時代から伝わる「御絵図帳」です。それをもとに、今は職人たちが現代の感覚を取り入れてオリジナルの柄を作っています。図柄をもとに、絣糸を括り、主に沖縄に自生する植物で絣糸を染め上げています。

少しずつ束ねた糸を計算された間隔で、模様部分を一箇所ずつ手括りで締め上げていくという大変手間のかかる方法で、独特のかすり模様をつくります。

織は、緯糸を経糸の間手で投げ込んで織っていくため、1日できるのはせいぜい1~2メートルぐらいです。少しずつ丹念に織り上げていきます。

南風原・織の工人たちと。

かすりの里は唯一海の無い町・・・。

緋の里 南風原町は、沖縄本島南部のほぼ中央にある県内では唯一の海の無い町です。

王府時代には、真和志間切、西原間切とともに首里三平等のひとつとして直轄地に組み込まれていました。



王府の統治下では、人々は共同作業で苦しい年貢制度を切り抜けてきた歴史を持ち、それは協調精神と団結心として今日も町民に受け継がれています。

また、沖縄戦では大きな打撃を受けたそうですが当時の南風原村も、昭和21(1946)年に村役場の再編とともに復興の第一歩が始まり、畜産を中心とした農業、織物などの生産が村の発展の原動力となり、近年は那覇市に隣接する地の利を得て、着実に発展を遂げた。

展示会の実行委員と南風原織の工人との懇親会
平成26年3月7日 松風苑(津嘉山)にて

「沖縄の市町村の多くは人口が減り続けて

いますが、おかげで風原町は毎年人口が増

え続けている元気な町です。」

(城間俊安 南風原町長)



現代の琉球かすりを支える織の工人たちが集まり、お互いの技の向上を誓った。



料亭 松風苑正門

南風原町津嘉山の老舗料亭松風苑は、ウルトラマンの脚本家として知られる金城哲夫氏(1938年7月5日~1976年2月26日)の生家としても知られている。

織や色合い 今昔の技術示

明治く昭期の黒や紺色で細かい柄の織と、模様が大きく、色合いも明るい現代の名工が織った作品を交互に置き、比較できるように展示している。野原八重子理事長は開会式で「目にするこののできない先人の作品を見て、ものづくりに役立ててほしい」とあいさつ。城間俊安町長らとテープカット



沖縄タイムス

(平成26年3月8日付け)